

## 中平正和さんキューバレポート

羽田をたって20時間余りやっとハバナに到着、深夜の空港はどこも同じ感じで殺風景。そのままバスでホテルへ。薄暗いロビーでチェックインの手続きの後部屋へ、さすがシェラトン、清潔であり冷房もばっちり、効きすぎて寒いが調整がわからずガウンなどにしっかりくるまって寝る。(スペイン語表示でわからないのがつらい)夜中何回かパチッと音がして真っ暗に、みんなは停電だというけど人を感知するセンサーとタイマーが作動しているのではとも思うがよくわからない。(懐中電灯持ってきておいてよかった)

朝はブッフエスタイル、広い庭園を眺めながら食事していた人が、気持ちいいけど虫がすごいと避難してくる。食事の内容はハム、チーズ、果物など多彩コーヒーは自動サーバー(アメリカンはウエイトレスがサブしてくれる)どっちのコーヒーも濃い。基本的に言葉はスペイン語、ホテルや観光地は英語もOKというがスペイン語風英語なのでわかりづらい。

そしていよいよ観光へ、まずは旧市街、アメリカの国会議事堂を模した建物、数ある要塞の中でモロ要塞へ、石積みの基礎に銃の狭間が並ぶ長い回廊など、素晴らしい城塞のような建物、また郊外のあちこちには戦いの痕を残す建物や戦闘機、大砲などが至る所に保存されており、市民も観光客も自由に触れることができる。市の中心部に残る旧市街には17世紀あたりに建てられたであろう石造りの店や住宅などがひしめく。中でも旧市を歩くとまさに昔の映画の中にいるように錯覚するほど中世の街並みを残している。ヘミングウェイ縁のホテルを見たりレストランで食事、名物料理という、肉料理や、豆ごはん?とても食べきれない量そしてあまーいアイスにデミタスコーヒーはどこでもおんなじ、昼も夜も、すぐに飽きてくる。食事を終えて町かどで待ち合わせしていると、通りすがりの若者が「ニーハオ」と私の肩をたたいてくる、周りはほとんど欧米系の観光客ばかりの感じだが向こうから見れば東洋系の顔を見たらまずは「ニーハオ」それとも「アニュハセヨ」らしい。どこまで中国人は世界に進出しているのだろうか。私は少しムツとしてやっと覚えたSoy H a p o n e s (私は日本人)とやり返したつもりだが、彼はニコツとしてそのまま去っていった。

そのあとは、この旅のもう一つの(表向きの)目標である医療機関への研修・見学である。まずは3Fの会議室で病院の説明、あちらは看護職を中心に部長、や国際外科など管理職(らしい)8人くらいがテーブルをはさんで(団体交渉みたい)な対応。少し説明がありVTRで概要をインフォメーション。(英語であったが私にわかろうはずはなかった)でも口頭・VTRともにキューバという国の歴史的な背景とそれにより、医療・教育の無償化を強調、そしてここでは(移植医療など)高度な医療機器を導入し、世界に先駆けた医療を提供していること、そしてその高度な医療を受けるために海外からも患者が来ること、そのため国家予算から支出される以上の収益を上げることができていることを(ぜひとも)広めたいそこ

のところをPRしてほしい熱意が伝わってくる内容に取れた。(Nsの労働条件などのやり取りがあったが、、、) そのあと国際医療科の病棟見学、一つの病室をみせてくれる。20畳くらいの広い部屋に大きなベッド、付き添い者用のベッドも、そして高層階の窓からは眺めの良い景色が。何か無機質な部屋であるが清潔そう。でも何かが違う、そう廊下や部屋に(日本では)当然ついているべき手すりが全く見当たらない。質問すると「なくて問題になることはありません」と、つまりすべてマンパワーでカバーしているらしい。そういえば人の数は多い感じ。院内のあちこちにスタッフらしき人が、そしてすべてのエレベーターに事務椅子に座ったボーイならぬエレベーターおじさんが。廊下には何かわからないが行列が。外来ホールには猫が散歩、院内通訳の女性が「ここは猫にも優しくてちゃんとケアしているんです」と。トイレを借りると、小便器には黒いビニールが掛けられ使えず、大のほうも便座が無く、ここが最高水準の病院の外来トイレ?と思うほど。でも正面玄関ではスタッフが握手して見送りしてもらいちょっとしたVIP気分。

トイレは何処も同じで、紙は流せない(南米などのほとんどがそうであるように紙の質が悪いのと詰まりやすいこともあり流せない)一流ホテルでも同様に水浸しのところもある。紙が無いところもあり要注意、その割に観光地などはほとんどチップが暗黙の習慣になっている、0,25ペソ(25円)が相場で、入口にお皿があるか、おばさんが手のひらを構えている。紙は不足しているらしくティッシュは見当たらない。他にチップの習慣は無いがホテルのマクラ銭は1ペソ(100円)ぐらいと、でもこれは観光客が始めたもので元々はチップの習慣は無いというが貧しい国、チップを集めれば通常の収入を軽く上回る、でもお土産屋さんでもががつがつしていないのが何か安心する。

最高水準の病院に中腰トイレに何かわからないものを感じながらバスへ、一緒のNsは「看護師がタトゥーしていた」「すごいスリットの入ったセクシー白衣」などさすが女性の視点はすごいと感じる。一方で駐車場ではカレー皿を持ち食べながら犬と一緒にスタスタ歩いてゆく兄ちゃんがいたり、?

そのあとはアメリカンクラシックカーに分乗し、市街地や郊外のホセマルティ博物館、革命広場をめぐりホテルへ。広場では「ここで15分くらい」の声に皆は「もういいから早く帰ろう」とちょっと過密スケジュールに加え、経験したことのないギラギラ太陽に、お疲れ気味でした。

クラシックカーはハバナ市内にかなり多く走っており、まだこんなと思うほど走っている。地方に行ってもトラックや作業車も車好きにはたまらない世界だろう。私と男性添乗員は女性ドライバーの運転する白と黄色のツートンの素敵な車で快走、質の悪そうなガソリンの排気ガスにむせながらお姉さんの運転にご機嫌、あとで写真を見るとかなりのお年のオバサマだったけど、途中信号待ちで停車すると、タクシードライバーから声を掛けられキャーハハと言葉を交わす陽気な連中、こっちまで年を忘れウキウキしそう。

翌朝はゆっくりの朝食の後、バクヤナグア大橋（100mを超すキューバ最大の橋）を經由し途中トイレ（0,25 ペソ）休憩とお土産、ラム酒をキューバ産のコーラで割ったカクテル「キューバ・リブレ」を飲む人も。そしてビーチリゾート、バラデロヘランチはデュポンの邸宅内の「マルシオン・サナデュー」で大西洋の美しいビーチを望むテラスで、魚、サラダなどそしてやっぱりあまーいアイスとデミタスコーヒー。食後はアル・カポネの別荘を見学ダウントウンを通りホテルへ。

このホテルは典型的なリゾートホテルで、食事・ドリンク・いくつかのプールとビーチをいつでも使えるようだが、とても使い切れない。その為か大雑把。ワインを頼めば普通底から数センチ注いでくれるがここではグラス一杯まで注ぐ、ウイスキーの水割りを頼んでも氷を2,3個入れてあとはウイスキーをドバドバと入れてよこす「いっぱい入れたからいくらでも飲め」と言わんばかりに、でもカクテルはしっかり作ってくれる。ヘミングウェイの好きだったフロズンダイキリはとっても美味、先に出た「キューバ・リブレ」に加えもう一つ三大ラムカクテルはモヒート。これもすっきりして飲みやすいいいものです。

エントランスホールではピアノ演奏はじめ生演奏、深夜までファッションショーなどイベントが続いていたとか。ここが社会主義の国なのかと疑いたくなるおかしな光景が夜ごと繰り広げられると。

でも部屋に帰ればテレビは国営放送らしいのと古いお涙頂戴的な映画チャンネルとドキュメンタリーっぽいものそしてラジオ替わりの音楽のみの二つの局がある程度で、朝になれば窓から鳥の声が聞こえ、庭を散策すればのどかな緑の風景とビーチ、鮮やかな花があちこちに咲く素敵な南の国である。

次の日はゲバラゆかりの地サンタクララへ。

ここはゲバラたちが革命軍を率いてハバナに侵攻する途中、政府軍の装甲列車を襲撃、その勝利が決定的になった場所であると同時に、それを記念してゲバラと仲間が眠る記念霊廟がある。霊廟は行事があったり雨が降ると内部へは入れないため若干雲行きが怪しいのでまずは急いでバスを飛ばしてゲバラたちの霊廟に向かう。入口で1ペソ出して真っ赤なカーネーションを買い内部へ、入ってすぐ左の壁にゲバラを中心に仲間たちのレリーフが壁面に施された小さな祭壇がありそこに花を手向ける。そして館内をガイドのやや控えめな声で展示されている写真、銃や手紙などの説明を受けつつ館内をめぐる。ここは軍が管理しており基本的に会話は禁止でガイドは結構気を使って我々も幾分神妙になる。外に出ると写真撮影もでき太陽がまぶしい、ここは赤道が近く、お昼頃には影が真下にしかできないため、目の悪い私は一面白いタイルの上を歩いているようで階段は危険。反対に回り建物の上にチェの大きな銅像が立っている。右手にライフルを、左手は列車襲撃時転落し骨折、それをのちに妻となるアレイダからもらった絹のスカーフで吊っている。そして彼が見つめる先は広々とした革命広場。そこで毎年メーデーの集会が開かれる。でも最近はそれに参加しない人も多いたか、と説明するガイドも「私も仕事が忙しいので参加しません」と、時代が変わればキューバさえ変わるのである。

そのあとは鉄道の駅と、近くにあるゲバラが襲撃した装甲列車を再現した場所へ。貨物列

車のような車両が3両展示されている。見学後2ブロック歩き地域の共産党本部の建物とその前に建てられているチェの銅像を見に行く。2ブロックと言っても結構歩かされた感、でも街並みを眺めながら、おんぼろ車が行き過ぎたり結構多い馬車が追い越して行ったり、風景に溶け込む南風を感じながら、幸い少し曇ってきたので助かった。バスからもガイドが時折「あれは小学生の集団」とか説明するが、それは制服のスカートに白いシャツ、その色が小学生から専門学校生などで決まっているからわかるのである。白いシャツがとても清潔な感じを受ける。立っているチェの銅像は実物大なのか結構小さい、「足も小さいよね」と。さらに移動すると今度はカピー口の丘へ低い丘だが見晴らしも良く、さっきいたであろう駅に列車が止まり走ってゆくのがよくわかる。この丘からチェたちは一気に下り、あの装甲列車を襲撃した、格好の場所である。照り付ける太陽、一瞬襲ってくるスコールなどを味わいながらまたバラデロのホテルへ高速道路をバスは走る。やはり古いのだろうクラシックカーを悠々と追い抜き結構飛ばして、このまま離陸するのではないかと思えるほどスピードを上げると、高速道路とはいってもところにより脇を馬車がパカパカ走り道端ではぽつぽつとリュックを担いだヒッチハイカーがどこに行っても立っているバスなどに交通事情が悪いため（お金を払って）ヒッチハイクすることが日常だそうだ。

翌日はヘミングウェイのゆかりの地フィンカビヒアへ

まずはヘミングウェイ博物館、広い緑に囲まれた彼の住居跡は今は博物館として保存されている。建物とその中の蔵書や調度品はそのままになっているため膨大な量を各部屋の窓などが開け放たれ、そこからは直接に眺めることができるが中に入ることはできない。でもそのほうがかえっていままでそこにいたかのような状態があるので当時の雰囲気を感じる感じがした。ヘミングウェイの使ったベッド立ったままで作業をするための台・○人目かの妻の使っていた部屋。などそしてその妻が回収し忘れたであろうピカソの絵、そう、彼にしてもカストロにしても何回か結婚して○人目の妻という表現をこの国では聞く。ガイドに「女性も何回も欠航するの」と聞くと「男性が目立つけど女性だって当然何回でも結婚する」と、情熱的なのか飽きっぽいのか。広い敷地にはプールと彼の持っていたヨットが保存されている。ヨットの前には小さな4つのお墓が。これは猫の墓とか。訳が分からん。いずれにせよ、緑に囲まれた日差しは強いが湿気が少ないため少し風が吹くと心地良い。入口広場のわきには赤い花が印象的であった。（フラボヤンというらしい）そのわきにはどこの観光地に行ってもあるチェ・ゲバラのTシャツ、絵葉書（これは観光地、空港売店などにあふれている）。ここから移動しコヒナル漁村にあるヘミングウェイの胸像を見た後、彼ゆかりの（なぜか）レストランで昼食、ここも似たような内容だが観光客相手のラテン音楽を堪能。DVDを買ってくれというので、結構いい感じのグループであり安いので何人かが買おうとすると、売り切れて無いと1,2人が買ったのみ、なんといい加減でしょう。

ゆっくり食事をとった後はハバナ市内に戻りお買い物の予定、でもそこは先日火事になりダメだと、旧市街の土産物屋場場で済ますことになる。ごちゃごちゃした町のあちこちの土産物屋を冷やかしながら「オーラ」と適当に声掛けすると仲良しになった気分。キューバの名産は何といっても葉巻とラム酒。こんなところで変なものをつかませたらと警戒していた

ら、主なものは土産物屋で買ってホテルのコーナーで勝っても値段は同じと。安心してチャートルの吸っていた葉巻（ロミオとジュリエット）などのセットを購入。

そしてホテルへ戻り早めに中華レストランでサヨナラパーティーののち早めにお休み、翌朝は4時半集合でホテルを発ち空港へ、また狭い機内で乗り継ぎを含め最後の苦役、約20時間のフライト。動かず眠れず画面の意味が分からず。食事はがつつり2食と、間食でカップヌードルにクッキーと飲み物攻め。一方で気になったのは最近立法化されたプラスチックに関する法律で、無駄に使わない方向だが、メインにデザート・副菜・飲み物のカップ、ナイフにフォーク・スプーン、少し食べて返却すると残食をちょっと分類するほかは大量のプラを袋にザッと投入する。軽量化や安全性など事情はあろうが1便当たり何百人分の廃棄食材とプラゴミ。なんか複雑な感覚でやっと羽田へ。

帰ってきて2日くらいは体調が戻らずボーっとしていました。もともと本ボケに加え時差ボケが加わると症状はヒドイ)

少しして「キューバって何だったのか？」と考えると何故かわからなくなる。南の楽園？まず自分が持っている固定概念が当てはまらない事。社会主義国でありながら様々な国と積極的貿易や観光を誘致する。バラデロのリゾートホテルと、少し離れた貧しい農村が共存。全体に貧しいが福祉・医療・教育の無償化。しかしその中でも存在する格差、最高水準の医療機関と、地方の医療提供、無料の教育費であるが小中学校へ行かずに早く現金収入を求め親を困らせる子供、しかし高度な教育を受けるためにはかなりの難関と。受験内容はスペイン語の文法とキューバの歴史が中心とか。体制を維持しながら新しい成長を目指す。その為には常に教育・宣伝を継続し、生活を保障してゆく、その努力を一瞬たりとも怠らないことが求められよう。そうでないと眼と鼻の先には正反対の体制で強大なアメリカが存在するのである。

その根底には底抜けに明るいらテンの血が流れているのかも。白人、黒人などあらゆる感じの人が共存して暮らしており、夜でも女性の一人歩くができるほど治安が良い、これはほかの国では考えられない事であり、今は日本でさえ、、、

前述したように買い物時も計算も間違えなく安心して、薄暗い土産物屋さんでも押し付けられることなく買い物ができる。

ほんの数日の観光地を中心の感想だが、これまでに経験したことの無い世界を少し見ることができたように思う。そして、今自分たちが持っていると考える豊かさ、すべての開かれた先進国日本であろうか？などなどその後の米朝会談、中東で続く自爆テロ、世界がどう動いているのか、あまり固定概念で見ると間違いをするかもなど不安感も希望も改めて感じてゆくのかな。